

言語による世界の概念化と特殊化の試み

——思考の流れを導くアクティブ・ラーニング——

植村和美

一 はじめに

近年、知識習得型学習に加え、段階的・発展的に生涯深める通時的および共時的な学びの力の必要性を強く感じている。具体的には、各校種の「卒業証書」を手にして学業習得を終えるのではなく、小中高の学びが段階的かつ発展的であり、学校生活だけでなく生涯を通じた通時的な力となる必要性である。また、現代社会で取得しうる膨大な情報知識を意味づけする共時的な力となる必要性である。それらは、グローバル社会に対応する伸びゆく力として、常に自分自身で検証され続けなければならず、既存の知識に対する疑問や答えの追求といった、情報を意味づけする探求の力でなければならぬ。

そのため、共同学習 (cooperative learning) や協働学習 (collaborative learning) に基づく探求学習の重要性が指摘されている。確かに、私たちはこれまで学校という現場において一面的な学力のみ保証してきたきらいがある。探求学習とは、これまでの知識習得型学習に

加え、学力や生きる力を多面的に捉え直す取り組みと云っていいだろう。「未だどこにも答のない問い」を想定する力。「自分たちで導き出す以外に答えがない」ことを知りつつ立ち向かう意志。現代というグローバル社会・情報社会で必要とされる学びとは、アクティブ・ラーニングというスタイルではなく、「アクティブ・ラーナーとしての力を育む」取り組みだと考えている。

私自身、高校生にとって確かな学力と「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力」を養おうと、話し合い活動やブレゼンといった「国語による主体的な表現等」を授業に多く取り入れてきたところ、昨年度と今年度の授業アンケートの結果、アクティブ・ラーニングが知識習得型学習に有効という回答が八割を超えていた。生徒の肌感覚を活かしつつ、高校生としての確かな学力と「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力」を養う授業について考えたい。

二 国語の授業を通して、目指しているもの

(一) 概念化 (Generalize) と特殊化 (Specify) に基づく、言葉の力の発展

「国語」における学びの発展には、小学校での周辺認知、中学校での社会認知、高校での自分が関わる社会、すなわち世界への認知といった言語概念の高度化が必要である。情報化社会の進展に伴い、「昨年度の世界のCO2排出量」といった生のデータは、言語としての説得力を失いつつある。高校での学びは、言葉の概念化と特殊化により、自分のものである言葉を他者と共有し、自分の言葉に説得力を持たせ、社会の中で生きる力を育む学びと言えよう。

例えば「将来」「未来」という言語がある。漢文で言うところの「将に來たらんとす」状態の「将来」は、現在の自分のありようから予測が可能だが、「未だ來たらず」状態の「未来」は、予測が困難である。しかし、過去や現在、遠い国々・立場の異なる人々への思いを巡らし、因果関係を確かめ、個々の「将来」が向かう全体的な一つの方向を見いだすならば、おそらくそれは「未来」に限りなく近いものになるだろう。こんなふうには「将来」「未来」といった一つ一つの概念的な言語に対する感覚を、特殊な自分にとって個別のものとして捉え直していく。

そのような言語の概念化と特殊化を常に循環させ続け、クリティカル・リーディングやロジカル・シンキングといった確かな国語力を育むべく、さまざまな協働学習を取り入れてきた。

(二) 教科書教材による「自我」への探求

国語の授業は、一クラス四十一名の一斉授業で行っている。昨年度、高校一年生の現代文1単位・古文2単位を担当し、今年度は高校二年生の現代文2単位・高校三年生の精読古典2単位を担当している。

求める学びは、教科書教材を用いた「物語」から「近代小説」への移行、すなわち「社会で共有される人物」から「自我」への移行の考察である。物語を読む者は、概念 (Generality) と特殊 (Specification) を正しく識別すると言われる。「社会の中で共有される自分」と、自らの中に見いだせない「自我」の識別が確かであるよう、授業で次の表のような確認を行った。

時期	教材本文	考察ポイント
一年	今は昔、比叡の山に兎あり ^{けり} 。僧たち、宵のつれづれに、「いざ、かいもちひせむ。」と言ひ ^{ける} を、この兎、心寄せに聞き ^{けり} 。さりとて、し出さむを待ちて寝ざらむもわるかりなむと思ひて、片方に寄りて、寝たるよしにて、出で来るを待ち ^{ける} に、すでにし出したるさまにて、ひしめき合ひたり。	・登場人物の 5 W 1 H ・語りの系譜 「けり」 ・最終文末の 現在形に よって、今 に語り伝え られる説話
四月	この兎、(中略) すべなくて、無期ののちに、「えい。」といらへたり ^{ければ} 、僧たち笑ふことかぎりなし。 『宇治拾遺物語 ちこのそら寝』	

六月	<p>今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹をとりつつよろづのことに使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。</p> <p>『竹取物語 かぐや姫の誕生』</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・竹取の翁の5W1H ・語りの系譜「けり」 ・「ことなり給ふべき人」への言問
九月	<p>ある日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っている。</p> <p>「ただ、今時分この門の上で、何をして居ただのだから、それを己に話しさえすればいいのだ。」</p> <p>・「きつと、そうか。」</p> <p>老婆の話が終わると、下人はあざけるような声で念を押しだ。そうして、一足前へ出ると不意に右の手をにきびから離して、老婆の襟髪をつかみながら、かみ付くようにこう言っだ。</p> <p>・下人は、剥ぎとった檜皮色の着物をわざにかかえて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りだ。</p> <p>・外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。</p> <p>・下人の行方は、だれも知らない。</p> <p>『羅生門』（芥川龍之介）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・登場人物の5W1H ・過去形からの開始 ・語られる「老婆」 ・語られる「下人」 ・自我の闇 ・自我の闇 ・「物語」からの逸脱

十月	<p>昔、男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらず、東の方に住むべき国求めにとて行きけり。</p> <p>『伊勢物語 —東下り—』</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・登場人物の5W1H ・語りの系譜「けり」
二年 六月	<p>いづれの御時にか、女御・更衣あまた侍ひ給ひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふ、ありけり。</p> <p>『源氏物語 桐壺』</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・登場人物の5W1H ・語りの系譜「けり」
二年 六月	<p>隴西の李徴は博学才穎、天寶の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃むところ頗ぶる厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかつだ。</p> <p>・或る夜半、急に顔色を変えて寢床から起上ると、何か訳の分らぬことを叫びつつそのまま下にとび下りて、闇の中へ駆出した。彼は二度と戻つて来なかつだ。附近の山野を搜索しても、何の手掛りもない。その後李徴がどうなつたかを知る者は誰もなかつだ。</p> <p>・翌年、監察御史、陳郡の袁孝という者が勅命を奉じて嶺南に使い、途に商於の地に宿つだ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・登場人物の5W1H ・過去形からの開始 ・自我の闇 ・「物語」からの逸脱 ・登場人物の5W1H ・過去形からの開始

<p>・「どうか、ほんの暫くでいいから、我が醜悪な今の外形を厭わず、曾て君の友李徴であったこの自分と話を交して、くないだろうか。」</p> <p>・虎は、既に白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮したかと思うと、また、もとの叢に躍り入って、再びその姿を見なかつた。</p>	<p>・語られる 「自我」</p> <p>・「物語」からの逸脱 ・自我の間</p>
<p>一月</p> <p>始めはあなたに会つて話をする気でいたのですが、書いてみると、かえつてその方が自分を判然描き出す事ができたような心持がして嬉しいのです。</p> <p>「こころ 先生の遺書」(夏目漱石)</p>	<p>・語られる 「自我」</p>
<p>三年 予定</p> <p>今宵はあたりに人も無し、房奴の来て電氣線の鍵を振るには猶程もあるべければ、いで、その概略を文に綴りて見む。</p> <p>「舞姫」(森鷗外)</p>	<p>・語られる 「自我」</p>

着目するのは、5W1H・過去形・語りによって始まり、作者・読者・登場人物が共有される古文の「物語」から、登場人物同士の語りによって見出される現代文の「自我」への発展である。ここでは、「自我」という言葉の概念化と特殊化について取り上げる。

三 思考の流れを導く、循環型アクティブ・ラーニング

「教育課程企画特別部会における論点整理について(教育課程企画特別部会報告)」(平成27年8月26日)では、「育成すべき資質・能力」として、「個別の知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三点それぞれに「子供一人一人の個性に応じた資質・能力をどのように高めていくかという視点」の重要性が指摘された。これらの育成のためには、「料理教室」型・「バスガイド」型といった従来の一方向型の一斉教授法ではなく、各々が行動する中で問題を見だし解決してゆく「パーベキューガイド」型・「ネイチャーツアー」型といった体験型教授法が必要と言われる。ただし、体験型の授業そのものが学びの目的化し、教師が生徒に矢のような指示を繰り返す、生徒が指示通り活動するアクティビティーならば、それは従来の一方向型学習と何ら変わりはない。

目的としての学びではなく、人生を生きる過程として確かな知識を身につけ、相互に関わりながら、より望ましい解決方法を求めて探求を続ける思考の流れを導くため、ワークシート学習やグループ学習を取り入れ、個人学習とグループ学習の場面・人数が変化し続ける循環型アクティブ・ラーニングを行ってきた。具体的な取り組みを、次にあげる。

三・一 ワークカード

授業の冒頭で、本文を読んで「感じたこと」「得られたこと」について、いつでも記入できるワークカードを用意しておく。正解のない複数の自由記述型小問を課し、授業時に指名。生徒は自分のワークカードから任意に二問以上を選択し、他者と共有したい内容を自分で選び発表するものとする。

三・一・一

課題1 『山月記』を「読み、心に残った場面を書きましよう。」

【記述例】

孤独

○「誰にもわからない」という台詞をくり返して、李徴が自分の、苦しく自嘲的な気持ちを話す場面。

○李徴の自己分析の時に「自尊心」と「羞恥心」という言葉が出た場面。何となく、心の片隅が切り取られる感覚になった。

友

○李徴が旧友に名を呼ばれ、自分であると明かしたところ。うれしさやなつかしさや悲しさ、つらさなどが入り交じっている。

○最後の最後で振り返ってみて欲しいと言った李徴の心も十分に察せるが、それにしっかりと答えた袁倬もまた良き友だった。

妻子

○お別れの時に李徴が妻子のことを頼む場面。「本当は、まず、このことをお願いすべきだったのだ。俺が人間だったなら。」という言葉が印象的だった。

別れ

○最後の別れのシーン。虎になった李徴と袁倬が丘から見下ろすときの二人のもどかしい距離感。

○最後に、自分の姿を見せるところで2度3度ほえたところ。その声には悲しさ、悔しさ、怒り、友や家族への愛もたくさん感情がこめられているから。

その他

○「理由も分からずに押しつけられた者をおとなしく受け取って理由も分からずに生きていくのが、我々生きもののさだめだ。」

○「人間はみんな猛獣使いである」という感じのことを李徴が言っていた場面が印象的だった。

↓ 生徒自身の「心に残った場面」を生かして読み解いていくことで、教材に対する興味関心や相互理解を深める。

↓ 初読段階での「心に残った場面」を抜き出すと、『山月記』のテーマとなる場面をしっかりと捉えていることがうかがえる。

三・一・二

課題2 『山月記』を読んだ最初の感想を書きましよう。

【記述例】

叢からの声の正体

○虎は本当に李徴なのだろうか。声に呼ばれて外へ駆けだしたところには本当は死んでいて、正に己の心を表す虎という形を持って、この世にとどまっているのではないか。

人間の心

○姿は虎だが、友と会って、人の思いが語られるのは、逆に嘘のない本当の人の気もちを表していると感じられ、人間本来を表しているだろう。

○最初は自分の身に起こったことをただ並べて話していたが、話が進むにつれて過去への後悔や自分自身への怒りなどストリートに伝わってきて良かった。

なぜ虎になったか

○虎になった理由がとても気になっていたが理由が明記されていなかったので、理由がとても気になりました。

○李徴はなぜ虎になったのか。他の動物ではいけなかったのか。

詩人

○なんで才があるのに袁修は李徴の詩になにか足りないと思ったのか不思議で、なんで足りないのかなと思った。

李徴と袁修

○李徴についてはたくさん書かれていたが、袁修は、名前がたくさん出てきたにもかかわらず設定が分かりにくかった。

○二人の男性の構図が、いいなと思った。再会したのにくさむら越しに虎と人が話していて、でも、お互い必要なことだけを話しているかっこよかった。

○李徴の語りが、客観的に自分を見て、卓越していると感じた。李徴の自嘲的な話し方と、袁修の優しさが身にしみた。

李徴への肯定

○とても切ないと思った。李徴を人間に戻してあげたい！せっかく

虎になって彼自身の人間としての人生を冷静に振り返り反省しているのだから、もう一度人間としてその悔いを改めた生活を送らせてあげたい。

○才能がないことがわかってしまうのが怖くて、才能を磨くことができないうのはすごく共感できた。何事も、全力でやるというのは言い訳ができないぶんすごく怖くて難しいことだ。

李徴への否定

○李徴の様に自分の高く持って生まれた能力に頼るのみで精進しない者にはなりたくないと思った。少し「うさぎとかめ」の童話を思い出した。

○李徴が自身の中にある俗悪な心によって虎に変化したという話だったが、もう人間には戻れない、と人間に戻ることを諦めているところが不思議だった。

その他

○自分がもし李徴のように突然一夜にして人以外の動物に変化してしまつたとしたら、一体何に成り果ててしまうのだろう。

○虎になるまではそこまで過程がなくて、虎になってしまつた後の後悔を語るので、悔いがないよう一日を過ごすことなどを伝えたいのかなと思いました。

↓ ゴシック体は、生徒が疑問を抱いた箇所である。生徒自身が初読段階で抱いた疑問点をもとに、授業を展開した。
↓ 波線部分の疑問をとりあげ、探究学習を行った。

三・二 ワークシート

空欄補充が目的化しない、記述式ワークシートの作成を課した。生徒自身に自己を客観的に測らせるとともに、教師が教材に触れている生徒像を明確に把握する。

三・二・一

物語の振り返り 自我の確認—自分を生きる—

【問】あなたは、羅生門の下から羅生門楼上まで、下人と老婆のやりとりを、すべて見聞きしてしまいました。下人が去っていた後、あなたはどうしますか？

「もし自分が下人だったら？」「もし自分が老婆だったら？」といったI F型の問いは、たてない。物語世界を自らに引きつけられるよう、生徒自身の自我に関わる問いをたてる。

【記述例】

自分に行えることを実行して助ける

○老婆に対して服をあげる。

○亡くなった人のために僧を呼んで埋葬してもらおう。

悪の連鎖に自分も入る

○自分もその羅生門の下にいるということは、自分も生活に困窮していると考えられるので、私なら下人の後を追って好きを見せた瞬間に下人が老婆から引剥ぎしたのもともと二人分を一人の下人から引剥ぎして生きる。

何もしない

○何もしないが良いと思う。何か関与をして、羅生門で起こっている、悪の連鎖に自分まで巻き込まれてしまうのは嫌だから。

自分は何もしないが、他の力を借りる

○何もしない。私は、老婆や下人の気持ちは分からないから。私が解決できる問題ではない。世間に対しては、今起きていることを伝える。SNSで拡散。

○世間に対して、この現実を伝え、上流階級の人たちにも関心を持ってもらえるようにはたらきかける。

○老婆に対しては、有罪であるので警察に対処してもらおう。下人はもうすでに消息をたてしまったわけだから、何もしない。世間に対しては法について考えてもらおう。

探求する

○「正義」や「悪」とは何によって決まるのかということについて思索し、本などを読んで、世の中にはどのような考え方があのかということについて知ろうとする。

○下人をおいかけて、この後の行動をまた観察する。おもしろそうなのと、気になるから。

「物語」への解釈

○「羅生門」の世界においては自分もまた世間の一部である。当時の社会情勢に呑まれる一人の人間として、心の内で善と悪が葛藤しながらも、老婆に対して下人と似た態度で追い討ちをかけるようなことをするのが、物語世界に生きる主体的意志をもって描かれる一人として自然ではないか。

物語の語り手として 物語を語る―他者と生きる―

【問】現在のあなたの物語を、5W1Hをふまえて、書いてください。

社会の中で、他者と共有される自己を確認させる。さらに、共有されない領域こそが自我であることを確認させる。

【記述例】

5W1H文

○附高祭間近、2―4の会計委員□□は、訂正印をもらうために学校中 森田先生を探して走り回っていた。

客観描写と主観の混在

○僕はよくドーナツ屋へ行く。黒く暑くそして苦いコーヒーを片手に甘いドーナツをむさぼっていると心が落ち着き頭もよく働くのだ。今もこうしてドーナツ屋で一人ドーナツを食べながら物語を書いている。また作文をしなければならぬ機会があればそのときも僕はドーナツ屋に行くのだろうか。

自己紹介文

○附属高校の男バスに一人、性格が変わるやつがいる。別に普段から怒りっぽいという訳ではない。むしろ寒いやつと形容するのが妥当なところだろう。だがこいつはコートに立つとききなりエンジンをかけられたバイクのように叫びだすのだ。そう、背番号31番□□である。

心情吐露文

○自分は生まれてこのかた十六年ごく普通の人生を送ってきた。良い家族と良い友達に恵まれ、幸せな毎日を過ごしている。いよいよ夏に入り、体はけだるく、授業に飽きてふと外のカラスを眺めながら、こう思う。何のために生まれて何をして生きるのか分からないまま終わるそんなのは嫌だと。これからの日々、たとえ胸の傷が痛んでも恐れないで生きる喜びをかみしめていきたい。

文学的な5W1H文

○日差し強い朝 無表情でけやき坂を登る十七歳はセミの声をかきけすようにイヤホンの音量を上げた

○一月も終わりに近いとある平日の昼下がり、買い物袋を抱えて歩く大人達の間を縫うように、制服に手提げかばんといういでたちの少年が、妙にしゃちほこばって歩いていった。少年の名は□□という。仙台で生まれ、仕事の忙しい父について家族で各地を転々としたのち、高校受験のためにいったんこの宝塚に落ちつき、そして今まさにその高校の出願に行くところである。

○附高祭前最後の日曜日、食堂近くの木の下で劇で使う背景の塗りをしていた□□は、昼下がりの肌を焼くような日差しに嫌気が差してごろんと木陰に寝ころんだ。あまりのまぶしさといままれするような空の青さに思わずぎゅつと目を閉じた。

○夏の暑さにぬるい雨の午に、西宮北口パンの駅前でハトのよく肥えたのを自転車で轢きそうになったが、濃くもった日の光りをポテリと吸収するまぬけなハトのかしらを見ると、どうも可哀想に思ったに違いない、自転車も、よけた。

↓ 5W1Hを文学的に表現し、心情説明にもなっている。

↓ 心情を直截的でなく、読み手にまかせる書き方となっている。

↓ 文中の□□には、本人名が入る。伏せて公開したが、生徒たちは誰の文章が分かったようだ。はからずも5W1Hは社会的共有の産物ということが実証されたと言えるかもしれない。

三・三 定期考査

定期考査では、「思考の流れを確認する記述型の問い」を7〜8問設定し、生徒の解答をデータ化し、考査後、全員に配布、探求学習の素材とする。根拠（本文からの参照）・論拠（本文以外の経験や引用文）・主張の三点が明確であり、文章表現が整っていることを採点基準とする。

三・三・一

二年前期期末考査

（平成28年9月実施）

【問】李徴が駆け出していった「闇」は、何を暗示していると考えますか。小説『羅生門』の結末部分をふまえて、あなたの考えを述べてください。

↓ 李徴がとびこんだ「闇」を「自我」と定義しつつも、「闇」を未来に対する「希望」もしくは「絶望」ととる相反する意見が出た。主人公に対する肯定感・否定感とあわせ、「自我」の確立は「希望」か、「絶望」か、深めたい。

三・三・二

二年前期期末考査

（平成28年9月実施）

【問】傍線部中で、「李徴（の声）」が「詩人」と評されたのは、なぜか。問題本文の波線部中、姿が人間だった頃の李徴が詠んだ詩に対して、袁儂が感じた「欠けるところ」とは何か、また、前教材「ミロのヴィーナス（清岡卓行）」で考えた「芸術」とは何かをふまえて、理由を述べてください。

↓ 採点要素として、「制作者の意図」「詩家しての名を死後百年に遺そうとした」といった考え方を否定し、「運命」「偶然」による「普遍性」「全体性」への到達をあげ、通時的・共時的共感や感情の共有に言及していることを条件とした。

三・三・三

二年後期中間考査

（平成28年12月実施）

【問】傍線部では、「闇」が薄れていく明け方に姿を示した一匹の虎が「叢」に消えて行きます。この結末から、『羅生門』の後日譚として『山月記』を書いた作者・中島敦にとって、「自我」とはどのようなものだったと考えられますか。古文からの日本文学の流れをふまえ、明確に論じてください。

【解答例】
○自我とは本文であるように人に対して自分を見るのではなく、自分が本来持ち続けなければならないもので、自己規定の文章

○「相手依存の自己規定（鈴木孝夫）」からも、そういう絶対的的自己規定が本物の自我だと思う。

○山月記では、他人に自分の罪を話すことで自分を見つめ直すような意志の弱い自我だが、一方で羅生門では他人に自分を投影することによって自分を見つめ直し強い決意の自分が担っている。これは日本人の自我が時代によりうすれてきているからである。

○かつて日本文学において自我は希薄なもので、それが闇に消えるという結末を迎える羅生門に対し、近代化が進み工業化、資本主義により生まれた新種のストレスを抱えた自我が、消えるのではなく闇に隠れるという結末を山月記は迎えた。よって、作者にとって自我とは近代化により、何かに同化させることのできないほど濃くなったものなのである。

↓ これまで授業で扱ってきた評論もふまえて、しっかり考察していた。「闇」と「叢」をよく概念化・特殊化できたと思う。

三・三・四

二年後期中間考査

（平成28年12月実施）

【問】傍線部A～Cで、「李徴」および「李徴の声」は、繰り返し泣きます。「悔い」「悲しみ」「悔い」を背負わねばならなかった「李徴」の「罪」はどのようなものだったと、あなたは考えますか。または「李徴」には「罪」はなかったと考えますか。明確に、論じてください。

【解答例】

《有罪 Guilty》（100人／164人）

李徴自身（の声）の発言

○私は李徴に罪はあったと思う。罪とは努力もしていないのに、結果を見て努力のせいにするからだから、李徴は自分がもう少し努力をすれば名を残せたかもしれないと思っっているということは、自分の限界までのぼりつめず、さらなる高みを見もせず目指さなかった。フィギュアスケートで頂に君臨する羽生選手ですら悔いはある。しかしそこには自分の努力に対する悲しみはない。

社会や他者との関わり方

○自分のことを自分自身で過大評価し、まわりの人を見下すことにより、家族や同僚にいやな思いをさせていることが罪だと思う。社会の一員である以上は他人を思いやる心を持たなければ、社会がうまく機能しなくなってしまう。

李徴の性情

○一般的に考えて虚偽の功を誇って他者に対する優越感を得ようとするのは他者から疎まれることになる。このようなことから李徴は、他者に対して虚飾を施した自分を見せ、宥和の機を自ら逃した罪がある。

○李徴は本文にあるように、自分の詩の才能を専一に磨くべきだったと後悔できるほど冷静に自分を分析できるのに、実際はできなかったいわゆるあの祭りの典型であり、何かが起こった後に後悔しないよう行動できなかった李徴の甘さが罪である。

増し続けている罪

○虎に変わった今でも、人々のことを「俗物」や「俺よりはるかに乏しい才能」など、もはや更生しようがないほどしみついた他者をみくだす心だと思ふ。また、人間であった自分の過ちは認めているが、その時の他者の気持ちなど一切省みておらず、「罪」はまだ積もるように思える。

人間の罪

○本文にあるように人間は誰でも猛獣使いであり、獣のような性情は誰もが持つものである。キリスト教によれば、人は皆生まれ持つて罪を背負っており、これを償わなければならない。この観点からは、李徴は、皮肉にも、この普遍的な人間としての原罪によつて虎になったのだと言える。

その他

○徴の罪は妻子を持つてしまったことだと思ひます。彼がもし詩家として大成するためにひきこもつて、詩作にふけり、生活が苦しくなつたとしても、それは本人が夢を追ひ、本人のみに責任を負うことですが、妻子を持つてしまったことで、自分のことのみにならぬ姿勢が崩れてしまつたからです。

↓ 他者と和して生きなかつたこと、社会の中で自分の生き様を買けなかつたこと等への倫理的に厳しい批判が見られた。

《無罪 Not Guilty》(64人/164人)

法的に犯罪を犯していない

○本文には「俺は努めて人との交わりを避けた」とあるのみで、虎

になる前に他人に対して犯罪を行つたとは書かれていない。また、日本国憲法にあるように、考えるだけなら何を考えてもいい思想の自由があり、臆病な自尊心、尊大な羞恥心にも問題はなく、罪は無かつたと考へる。

人間は、みな李徴と同じ

○人は誰でも周りに打ち明けたくないこと、自分でも嫌になるほどの自尊心を持つてゐるもの。私も好きな人に「好き」と言えないあきれるくらいの自尊心があります。

自我⇄善

○臆病な自尊心や羞恥心が顕著に表れた結果、李徴は虎になつたが、そこには意図は存在せず偶発的な出来事に過ぎない。自らの性情に素直であることは善であり、李徴が虎になつたことは素直さの結果であるので罪ではなく善いことである。

反省による罪の浄化

○たしかに人間だつた頃は自分の才能に満足して怠慢だつたが、虎の姿になつた時は、自分の過去の行いをしっかりと反省することできていたから。

李徴だけのせいではない・周囲の人間の責任

○李徴は人間だつた頃、誰にも自分のことを理解してくれる人がいなかったため、李徴だけのせいで虎になつたのではないから李徴に罪はないと思ふ。

○妻子を養つていくという点においては、現代のように共働きをするといふように、妻も支える手立てがあつたように思ふ。

↓ 法的にルールを破り罪を償ふことが求められる「Crime」と、

人間としての倫理的善ではない状態の「Guilty」を区別した。

↓ 誰もが李徴と同じように考え行動してしまう可能性があり、周囲の人間や社会の責任を指摘する意見が見られた。

↓ 犯罪か否か、という視点も含め、李徴に対する擁護のかつ穏やかな意見が見られた。

三・四 ワークシヨップ

現在、『山月記』から導き出した六つのテーマに対し、三〜四人による班ワークを行っている。班での考察と資料作成後、全体発表を考えている。

【探求1】李徴（李徴の声）は、「人間だったころの李徴」と「虎になつた後の李徴」を、どのような存在だ客体化し、捉えていますか？

↓ 李徴の本質は変わっていないが、唯一、自分を語ると言う点で大きく変化したと捉えた。

【探求2】李徴は、なぜ「虎」以外の人を食う動物ではなく「虎」になつたのですか？

↓ 虎に対するイメージがやや固定的であり、今後、強さや美しさに踏み込みたい。

【探求3】「李徴の声」の正体は、本当に李徴ですか？

↓ 寓話として捉えており、小説としての読解に踏み込みたい。

【探求4】『山月記』と『人虎伝』の違いは、どこですか？

↓ 比較をふまえた考察や、作者の意図にも踏み込みたい。

【探求5】『山月記』の「李徴の自我」と『羅生門』の「下人の自我」は、どのように異なりますか？

↓ 下人が明確に生きることを選択したのに対し、李徴は反省のみで自分の生き方を選べないことが指摘された。絶対的の自我・相対的の自我の違いを明らかに、その長短に踏み込みたい。

【探求6】『山月記』に用いられる「月」「叢」といったモチーフには、どのような意味・効果がありますか？

↓ 「闇」は絶対的な存在であり、誰が見ても闇だが、「叢」は相対的な存在であり、その大小や堅さ柔らかさは見る人の判断に任される。一度「闇」に消えた李徴が、声だけの存在として再登場し、最後は「叢」に消えて行く意味を、小説教材における自我世界のありかたとして読み深めたい。

【全体探求】班別探究活動から、統一テーマワークへ

↓ 下人の行った引剥ぎは犯罪 (Crime) である。しかし、駅吏から「人食い虎」と定義された虎が「人を食う」ことは犯罪 (Crime) ではない。では、人間の心を持つ虎が「人を食う」ことは、人間としての罪 (Guilty) か、罪ではない (Not Guilty) か？ 悔恨の涙を流す李徴は、罪人 (Guilty) か、罪人ではない

い (Not Guilty) か? 「自我」は人間の原罪 (Guilty) か、原罪ではな (Not Guilty) か? 生徒の意見は、有罪 (Guilty) 61%、無罪 (Not Guilty) 39%であった。ただ、「芸術至上主義」の観点が弱く、詩人を志す一途さや詩を読むために人生を捧げるといった生き方への言及は弱かったと感じる。

この考察を深め、次の小説教材『こころ (夏目漱石)』では、恋人である「お嬢さん」と親友である「K」にかかわる「私」の「自我」を扱う。さらに、「私」「K」「お嬢さん」によって表されるものは何か、考察する。

三・五 「私の物語」 作成

【課題】「私の物語」を書きなさい。なお、物語の中に「闇」または「叢」を入れること。字数は八百字以上とする。

↓ 小論文指導では構成や接続詞といった技術的な指導にかたよりがちだったが、生徒自身の心情や有り様を言葉にし、社会の中で他者と生きる自分を自ら描き出すこと、すなわち自分の「物語」を自分で描き出すためのマイ・ナラティブを、生徒に課したい。

四 振り返りと今後の課題

一、二年生で探求学習の取り組みの後、全員にアンケートを行った。I 一年生古文『平家物語』・II 二年生現代文『ミロのヴィーナス』教材における「大変そう思う」「そう思う」と答えた生徒は、

次の通りである。

【協働学習で、新しい知識を得た】 I 85% II 73%

【協働で考えることで、物語の内容理解が深まった】 I 84% II 81%

【評論の構成に対する理解が深まった】 I 83% II 83%

【協働で行うことで、文法や言葉の意味への理解が深まった】 I 73% II 72%

【協働で学習することで、取り組む意欲が高まった】 I 73% II 72%

【論文を書くことで自分の考えが確かなものになりましたか?】 I 50% II 50%

【国語で身につけた力はどうなものですか?】

II 「記述力」 44%

ALは、生徒の積極性・意欲・関心に結びついたと考えられるが、注目すべきは、七割以上の生徒が作品の文法理解・内容理解・知識の習得に役立った答えたことである。実際に取り組んだ生徒の多くが、ALは知識習得に有効だったと感じていることが分かった。ただ、二年生現代文での実感より一年生古文での実感のほうが大きく、現代文はあくまで自分自身で読み味わい、理解・納得するものといった考えが感じられた。また、書くことの有用性への実感は学年が上がるにつれ増すようだが、自由記入欄を見ると「考えれば考えるほど、分からなくなる」「自分の考えに確信が持てない」など、正解を求める傾向や、明確な評価の無さに対する不安感がうかがえる。論述を多く課しているが、書くことで身につく力につい

での客観的な考察が必要だと感じた。

探求学習活動の適切な評価方法については、次の通りである。

「班の仲間評価」 I 45% II 23%

「自己評価」 I 18% II 41%

「教師評価」 I 35% II 20%

「第三者からの評価（研究大会参加者など）」

一年生で行った班別ブレゼンテーションに対するクラス評価では、全クラスで、八班中、最初に発表した班の評価が七位か八位に終わるといふ残念な結果が出た。最初の発表班には辛めに点をつける傾向がうかがえ、相互評価を取り入れる際は、事前に評価方法についてもしっかり学ばせる必要があると感じた。ただ、探求学習においては、結果よりも探求活動そのものをしっかり見て評価されたいとの生徒の思いが強く、教師評価に対する信頼性は増したと思われる。なお、現代文の授業でのICT機器の利用に対し、Iで49%の生徒が必要を感じていなかった。今後の利用方法について、しっかり考察していきたい。

五 おわりに

入試のマニユアル化・社会に横溢する情報・ビッグデータ・グローバル社会の発展等によって、私たちは学びそのものをマニユアル化・個別化しがちである。アクティブ・ラーニングは、授業者と生徒による生き生きとした思考の発信と流れ、目指す着地点への意識の焦点化であり、氾濫する情報や想定を超えて広がりつつある現

代社会において、学びを自分たちの手に取り戻し、教育の多様性を保証するキーワードであるように思う。

生徒のまなざしや疑問、ひらめきや思考を取り上げるためには、集中力や想定力・多様な準備、教師への信頼の構築が重要であり、教師自身の通時的・共時的な研鑽が必要と思われる。具体的には、まず、①授業方法やその内容について他教科や他校種の先生方と共有し、生徒の思考の流れへの想定力を高めておくこと、また、②担当教科のみでなく総合学習や部活動といった様々な学校活動に積極的に参入し、学びの場面への適応力を養っておくこと、さらに、③多様な場とりわけ公の場で自分の実践について発表・報告し、主観に偏らない客観的思考力を身につけることがあげられるだろう。欲を言うなら、④さりげないユーモアやおおらかさが必要だと思われる。私自身、常に生徒とともに学び続ける姿勢を示していきたいと思う。

学びは、いつの時代も常にアクティブである。生徒たちの真摯なまなざしに応え、「主体的」「積極的」「興味」に導かれ、新しい知識や友や教師ひいては新しい自分自身との出会いに満ちた学びを構築していきたい。

研究大会および本原稿の取りまとめに携わってくださいました大学の方々、先生方、本当にありがとうございました。

(大阪教育大学附属高等学校池田校舎)